

岡山大学経済学会雑誌40(4), 2009, 49~72

近世日本における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程

——西海捕鯨業地域の特殊性の分析——

末 田 智 樹

(中部大学)

1. はじめに

拙著で論じたように西海地方の捕鯨業は、とりわけ平戸藩、大村藩、唐津藩、五島藩、福岡藩、対馬藩などの複数の藩における広範囲な海域で展開していたが、この西海捕鯨業地域において捕鯨業に携わっていた大規模な経営事業体である鯨組は、近世前期より中期にかけて生成し、そして多くの鯨組が勃興していたことが判明した。ことに大村藩、平戸藩、五島藩などにて幾多の鯨組の出現がみられたが、拙著においては大村藩の深澤組、平戸藩の益富組、五島藩の有川組が有名な鯨組であることで考察し、その活動に関して解明した⁽¹⁾。そこで本稿では、これらの鯨組が西海地方において、どのような捕鯨漁場において展開していたかについて、平戸藩と並んで捕鯨漁場が集中していた五島藩における鯨組の変遷および経営展開の状況を検討することで、近世日本の西海地方の捕鯨業地域における捕鯨漁場の地域的集中の形成過程を明らかにし、同時に西海捕鯨業地域の特殊性を浮き彫りにする。

さらに拙著でも論じたが、これまでは平戸藩生月島の益富組の研究が中心であり、五島藩の有川浦の江口組については、近世西海捕鯨業史研究の中でもまだまだ不明瞭な部分も多い⁽²⁾。そこで、従来経済史・経営史的視点からの考察であったが、五島藩の捕鯨漁場と鯨組の変遷過程を地理学的側面から分析することで、近世社会経済構造の研究において、歴史的視点からの地域史研究一辺倒ではなく、地理学的側面すなわち空間的な視点から照射する地理学的地域史研究の重要性を述べたい。そして、その視点からも西海捕鯨業地域の特色を導き出すことを大きな目的とする。

しかしながら、あくまでも近世社会経済構造を取り扱うために、藩領国との関係を見捨てることはできない。これまでの西海捕鯨業史研究の蓄積は、鯨組の個別経営の検討に重点が置かれてきたために、藩との財政構造と捕鯨業の関係について正面から取り扱った研究は皆無に近い。このような研究成果の中で唯一、松下志朗が平戸藩と益富組との関係について詳細に考察した論考がある⁽³⁾。彼は、平戸藩内で最大の鯨組であった益富組からの多額の運上銀が、平戸藩の宝暦一天明期に露呈してくる

1) 末田智樹『藩際捕鯨業の展開－西海捕鯨と益富組－』（御茶の水書房、2004年）。

2) 同上。

3) 松下志朗「西海捕鯨業における運上銀について－平戸藩領生月島益富組を中心に－」（『福岡大学創立三十五周年記念論文集』人文編、1969年）。

藩財政の窮乏を乗り越えるために、年貢以外の主要な収入源として大きな役目を果たしていたことを指摘している。しかも、捕鯨業による膨大な運上銀による収入確保の結果、平戸藩においては他の諸藩と比較して、国産会所や専売制への志向が明確に出てこなく、捕鯨業からの運上銀がそれに代わる役割をしていたとも論じている。これにより益富組による平戸藩への数多の運上銀の重要性と、平戸藩の中での近世中後期における西海捕鯨業の意義の大きな一端が解明された。

一方、これまで九州地方の諸藩における国産会所や産物会所仕法の成立と発展については吉永昭の研究がある⁴⁾。その中で九州地方における主要な産業に関して彼は、「石炭、櫨、蠟、紙、砂糖」としているのみで、本論文の主題である捕鯨業に関しては、残念ながら全く触れられていない。しかし、西海地方において捕鯨業が行われていた領国には、先述の通り平戸藩のほか大村、唐津、五島、福岡、対馬の諸藩があり、これらの領国内の捕鯨漁場においても捕鯨業が盛んであったことを考慮に入れると、これらの諸藩と捕鯨業の関係を浮き上がらせることは十分可能であり、また解明しなければ、吉永の研究は片手落ちとなってしまふ恐れがある。その意味も込めて本稿では、西海地方の鯨組と五島藩との関係、つまり同藩における鯨組展開の経緯を分析し、五島藩の捕鯨業に関する財政政策を絡めることで、同藩における捕鯨業展開および同藩における鯨組の地域的集中の意義を明らかにする。

2. 五島藩の捕鯨漁場

近世において捕鯨業が行われるためには、重要な前提条件として地理的な条件があげられる。それは近世の捕鯨業が沿岸捕鯨業であったために、鯨が多数往来する漁場を藩内に有しておかなければならなかった。そこで勿論のことながら、本論に入る前に五島藩の捕鯨漁場についてみておきたい。

まず表1に江戸時代の全国的な捕鯨漁場を作成してみた。これは江戸時代後期の有名な蘭学者であった大槻玄沢の一族であった、仙台藩の藩校養賢堂の学頭であった大槻清準が、文化5（1808）年に執筆したと言われる『鯨史稿』から作成したものである。近世では紀州、土佐、長州、西海の4つの地方で捕鯨業が展開されていたことが読み取れるが、より詳細に地方別に調べると、圧倒的に波線以下の西海地方の諸藩に捕鯨漁場が数多く存在していたことがわかる。しかもその中でも平戸藩と五島藩のそれぞれの領内の島や浦に、各20ヶ所以上の漁場があったことがみてとれる。加えてここからすでに西海捕鯨業地域の特色が鮮明になる。すなわち、この両藩が西海捕鯨業地域の捕鯨漁場の大半を占めていたことであり、前述したように、これまでは平戸藩の捕鯨業史研究で解明されていた西海地方の捕鯨業像に、本稿の五島藩の捕鯨業活動や鯨組の展開で明らかになったことを重ね合わせることで、さらに2大捕鯨業領国による西海捕鯨業地域の特色を強調することができよう。そこで、表1に記された五島藩の捕鯨漁場を判明できる範囲で図1に掲げてみた。

これをみると宇久島を含め五島列島の北から南の諸島まで捕鯨漁場が点在しており、大別すると宇久島、上五島と下五島の東西の4つ地域の沿岸部や小島にとくに集中していたことがわかる。しかし

4) 吉永昭『近世の専売制度』（吉川弘文館、1973年、新装版、1996年）166～185頁を参照。

実際には、本当にこれら多くの捕鯨漁場が毎年の捕鯨漁期に稼働していたのであろうか。そこで文化5年より遡るが、まず唐津藩の木崎盛標が安永2（1773）年から約10年の歳月をかけて完成させたとされる『肥前国産物図考』の「小児の弄鯨一件の巻」をもとに作成した⁵⁾、安永期（1772～1780年）頃の西海地方の捕鯨漁場を表2として載せてみた。表1と図1の両方と比較してみると、捕鯨漁場が著しく減少していることがすぐに理解できる。

さらに、寛政期（1789～1800年）頃の西海地方の捕鯨漁場を表3に示してみた⁶⁾。しかも五島藩に絞ってみれば、表2と表3に共通する捕鯨漁場が明確になる。つまり、それに表1を重ね合わせてみ

表1 江戸時代の捕鯨漁場

国 領		捕鯨漁場	
東海道 東山道 南海道 北陸道 山陰道 山陽道	伊勢州		勝山 銚子 磐城 熊野太地浦、古座浦、三輪崎、尾佐津 津呂、久保津 小木ノ浦 高浜 伊根 長州、ヒンシウ 通ヒ、瀬戸崎、川尻、津ノ島
	三河州		
	駿河州		
	安房州		
	上総州		
	下総州		
	常陸州		
	陸奥州		
	紀伊州		
	土佐州		
能登州			
越後州			
丹後州			
但馬州			
隠岐州			
長門州			
西海道	筑前州	唐津領 平戸領 大村領 五島領 薩摩州 壱岐州(2) 対馬州	搦目大島、小呂島 小川島、馬渡島、呼子、名護屋、壁島 津吉、生月島、的山大島、小植賀、八幡、芦辺、大石、妙見、恵比須浦、浪ナシ、河内、黒島、鷹島、多久島、鴻ノ島、大称板、イヤノ浦、獅子、薄香、田助、野崎 柿島、榎島、平島、崎戸、松島 魚ノ目、有川、宇久島、板部ノ大島、柏崎、黒瀬、芋島、下山、八幡、コモノ浦、神崎、鯛ノ浦、トモスミ、ニタクヒ、赤島、黒島、雷江、玉浦、火島、牛津、大宝、タンナ 甌島、鬼ヶ崎、樺島(1)、大浦 前海浦、勝本浦、印通寺、ハセ、タナエ住吉、長者原 鰐浦、廻浦、伊奈浦、茂戸、カラツキ、尾崎
	肥前州		

出所) 大槻清準『鯨史稿（江戸科学古典叢書2, 解説者大矢真一）』（恒和出版、1976年）293～320頁より作成。

備考) 波線以下が西海地方の捕鯨漁場。註(1)：『鯨史稿』には「樺島ハ薩州ノ地ニ非ス」と記載されている。註(2)：正確には平戸領に含まれる。

5) 木崎盛標「小児の弄鯨一件の巻」（『肥前国産物図考』（佐賀県立博物館、2003年）、『日本庶民生活史料集成』第10巻（三一書房、1970年）、佐賀県立博物館編『玄海のくじら捕り－西海捕鯨の歴史と民俗－』（佐賀県立博物館、1980年）などを参照。

ると、図1にて四角で囲んだ宇久島、有川浦、魚目浦、柏浦、板部大島（黄嶋）⁷⁾、黒瀬浦の6ヶ所が浮かび上がってくるのである。おそらく表1の著者である大槻清準は、当時の資料やその他の情報

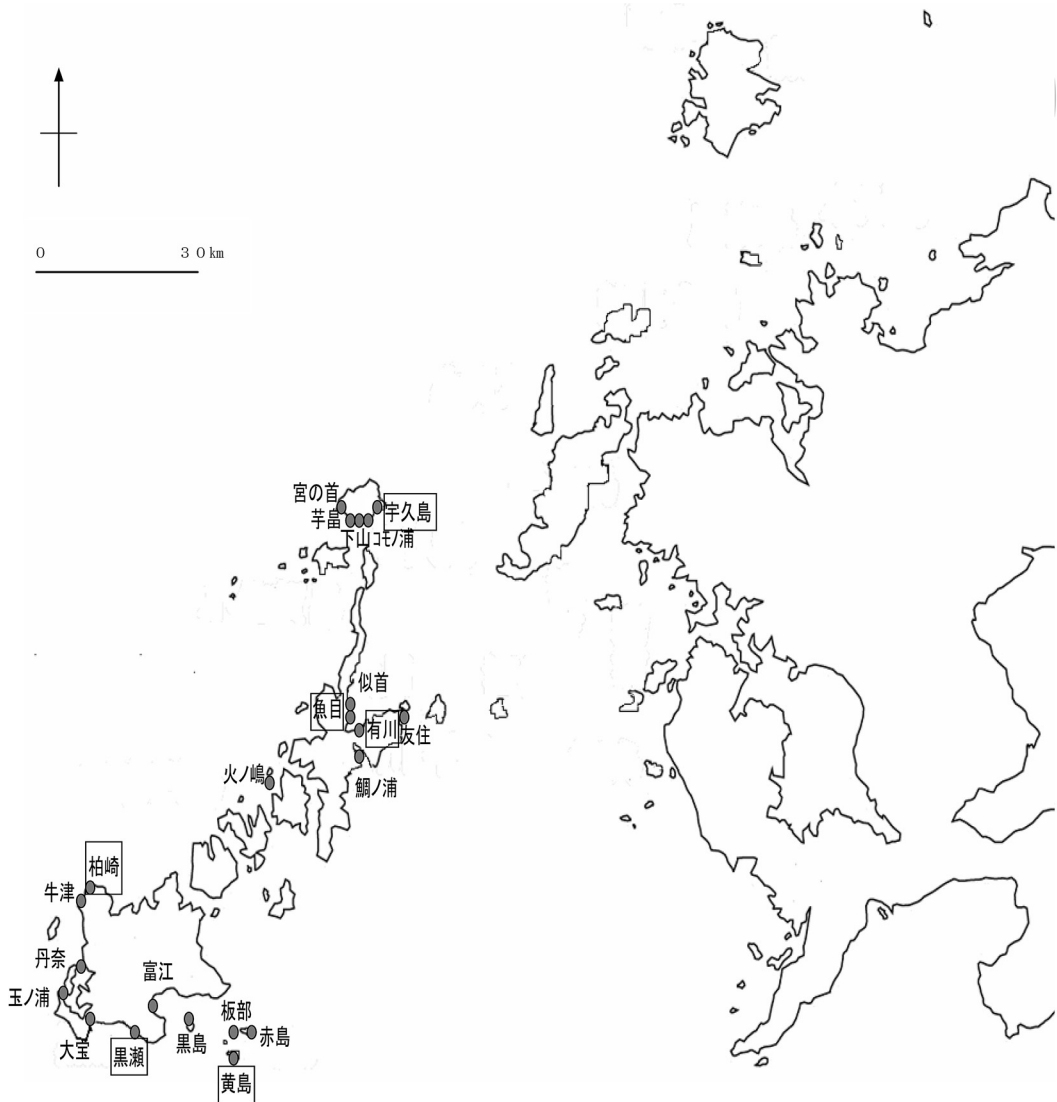


図1 近世前期の五島藩の捕鯨漁場

6) 表3は、天保2年卯仲冬霜月青方田富運善写之『五島に於ける鯨捕沿革図説』（長崎県立長崎図書館所蔵）より作成したが、これは『鯨魚金覧笑録（小川島捕鯨絵巻）』（長崎歴史文化博物館所蔵）をもとに作成されたものであり、寛政8（1796）年頃の作と言われている。この点に関しては、佐賀県立名護屋城博物館編『くじらといきる—西海捕鯨の歴史と文化—』（佐賀県立名護屋城博物館，2006年）15頁を参照。

7) 表2の「いたべの大しま」と表3の「黄島浦」は同一の島であり、同様に「浮島」と「宇久島」も同一の島を示している。また、冬組および春組については末田前掲書，第3章を参照。なお、表3の「五島福江領」と「五島富江領」に関して末田前掲書，第4・5章を参照。

表2 安永期(1772~1780)における西海地方の捕鯨漁場

地域	主な捕鯨漁場
壱岐	前目浦, 勝本ノ浦
平戸	あつちの島, かきのうら, 生月浦
五島	柏浦, 有り川浦, 魚目浦, 黒瀬(春組斗), いたべの大しま, 浮島
対馬	わにの浦(春組斗), まわり浦(同)
筑前	かしめの大しま, おろの島(冬組斗)
長門	かよひの浦, せんさき浦

出所) 木崎盛漂「小兒の弄鯨一件の巻」(『肥前国産物図考』, 佐賀県立博物館, 2003年) 14頁, 『日本庶民生活史料集成』第10巻(三一書房, 1970年) 782頁, 佐賀県立博物館編『玄海のくじら捕りー西海捕鯨の歴史と民俗ー』(佐賀県立博物館, 1980年) 140頁より作成。

備考) 壱岐は平戸藩領内に含まれる。

表3 寛政期(1789~1800)における西海地方の捕鯨漁場

藩領	主な捕鯨漁場
五島福江領	柏浦(冬), 黄島浦(春), 有川浦(冬・春), 宇久島(冬), 大田浦, 丹奈浦, 西津浦
五島富江領	魚目浦(冬・春), 黒瀬浦(春)
大村領	江島浦(春), 平島浦(春), 蛸浦(春)
平戸領	前目浦(冬・春), 勝本浦(冬・春), 御崎浦(冬・春), 大島浦(冬), 津吉浦(春), 小値賀浦(冬)
唐津領	小川島浦(冬・春), 馬渡島浦(冬)
筑前領	大島浦, 於呂島
対馬領	廻り浦(冬・春), 伊奈浦(春), 鰐浦, 吉野浦

出所) 天保二年卯仲冬霜月青方田宮運善写之「五島に於ける鯨捕沿革図説」(長崎県立長崎図書館所蔵)より作成。

備考) (冬・春)とは冬・春の両組のことであり, (春)とは春組のみ, (冬)とは冬組のみのことである。

から得られたすべて捕鯨漁場を列記したのであろうが, 実際にはそのすべての漁場において鯨組が開かれていたわけではなかった。表2および表3で掲げた西海地方の捕鯨業に絞った図誌資料からは, 実のところ五島藩において, 近世中期頃に頻繁に捕鯨業経営が行われていた漁場は6ヶ所であったと推測できる。

では, なぜこのように近世前期に密集して存在していた五島藩の捕鯨漁場が, 近世中期頃には一部の島や浦に地域的に集中していったのであろうか。これは五島藩だけではなく, もう1つの捕鯨国であった平戸藩も含めた西海地方全体の問題ではあるが, 本稿では五島藩に関してより深く考察していくことで, 平戸藩も含めた西海捕鯨業地域全体の捕鯨漁場の集中問題についても解答を示すことを試みて, それが紀州, 土佐, 長州の他の3つの捕鯨業地方との相違点を述べることにもなろう。以上, これらの点を解明するためにも, 次節から五島藩の鯨組の生成・発展・展開過程の分析に入る。

3. 延宝・元禄・享保期の五島藩における鯨組の始動

「青方文書」の中から五島藩における網取捕鯨業の始動について、正確に読み取れる記録は拙著でも論じたように、延宝6（1678）年には大村藩の鯨組主深澤儀太夫が、貞享元（1684）年には五島藩宇久島の鯨組主山田茂兵衛が、それぞれ現在の五島列島の上五島に位置する中通島の魚目浦と有川浦へ進出してきたことである。その後も拙著でも述べたように元禄初期頃までこの両浦において、それぞれとの浦との共同捕鯨業を行った。

大村藩の深澤儀太夫に関しては、すでに拙著において西海地方の鯨組の中での位置づけを含めて検討して繰り返すことにはなるが、深澤組は図2にあるように自領である大村藩の松島を拠点とし、平島、江島、蛸浦、崎戸浦などで捕鯨業経営を行っていた組であり、また遠方では平戸藩の壱岐へも進出しており、寛政初期に廃業するまでは西海地方における近世中期の最大の鯨組であった⁸⁾。

一方、宇久島の山田茂兵衛に関しては詳細な研究はないが、1679年前後の延宝期の終わり頃から網取捕鯨業を始めたと言われている。その後は2代目山田茂平治、3代目山田紋九郎が鯨組主として活躍し、正徳5（1715）年の廃業まで宇久島にて鯨組経営を展開した⁹⁾。

元禄初期の五島藩有川浦・魚目浦への出漁状況

- (1) 五島藩宇久島の山田茂兵衛組により有川浦にて網取法を共同で開始
 - (2) 大村藩松島の深澤儀太夫により魚目浦にて網取法を共同で開始
- 深澤組は大村藩内の平島・江島・蛸浦などのほかに平戸藩壱岐へも出漁

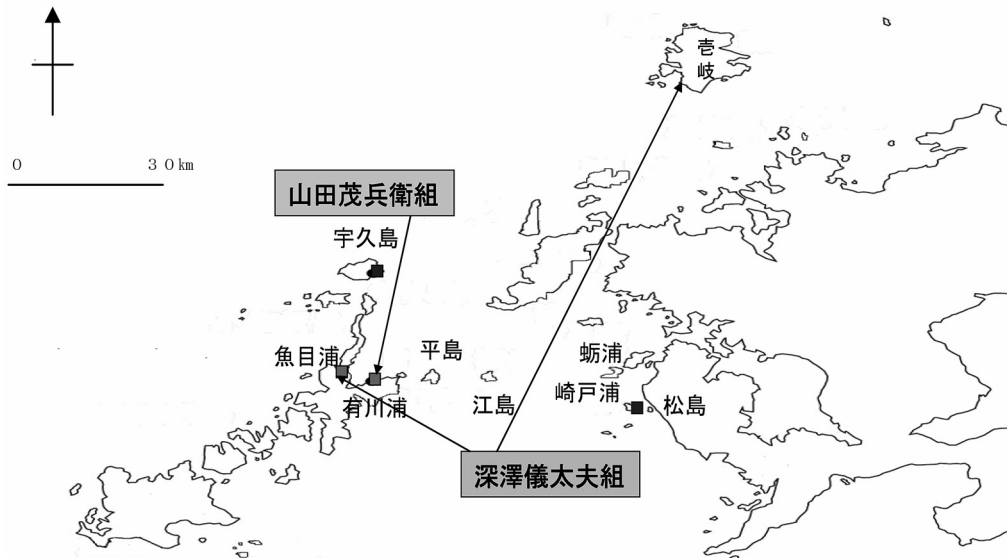


図2 元禄初期の五島藩・大村藩における鯨組の展開

8) 末田前掲書，第2章を参照。

さて、既述のように延宝期（1673～1680）から貞享期（1684～1687）頃にかけて深澤組が魚目浦へ、山田組が有川浦へ網取法を主とする網組を導入した時期であって、それ以前では捕鯨業はどうであったらうか。慶長初期頃から創始され、魚目と有川の両浦附近では突取法による捕鯨業が実働されていた。拙著でも考察したように、平戸藩と同様に五島藩へも寛永初期には紀州地方の鯨組が進出し、それらの鯨組と共同で有川村庄屋の江口甚左衛門が突組を開始したと言われている¹⁰⁾。したがって、この両浦では江戸時代初期頃から紀州地方の鯨組より突取法の捕鯨技術の伝播があり、この方法によって捕鯨業が始められ、次いで17世紀後半の延宝・貞享期前後頃には網取法による捕鯨業が始動されたのであった。

ところが、この網取法が導入される少し前の寛文2（1662）年に、五島藩は福江領と富江領の2つに本・支藩化され、そのため拙著でも触れたように、それ以後捕鯨業が盛んとなったために、延宝・貞享期から元禄初期まで有川浦と魚目浦との間で海境争論が起こり、幕府まで調停を求める大騒動となった¹¹⁾。ここでは、この内容については省略するが、この争論過程でどちらの浦が優勢に捕鯨業を展開できるかを競い合うために、他藩や他の島から最先端の網取法を導入して協力を求めることになった。しかしながら、いずれにしても五島藩においても平戸藩と同様に近世前期から藩内において突取捕鯨業が開始されており、その中心的存在の浦が有川と魚目の両浦であり、大村藩の深澤組と、同じ五島藩でありながら図2をみてもわかるように有川浦からは北方の島である宇久島の山田組の援助により、より一層五島藩における代表的な捕鯨基地となった。そして、この上五島の有川湾の捕鯨漁場が近世前期をへて、17世紀後半から以後幕末期までの五島藩における捕鯨業の中心地となるのである。

最終的には元禄3年（1690）年に有川浦の勝利で終わり、以後享保期後半まで先述の有川村庄屋の江口甚左衛門の四男であった江口甚右衛門とその子江口甚五右衛門が組支配役となり、享保13（1728）年まで有川6ヶ村を中心とした捕鯨業経営を行った。それを示すと表4になる。さらに、この時期の有川組の経営状況に関しては、捕鯨頭数と利損銀高を図3に示した。また累積利損銀高を載せると図4になる。これによって、元禄期からの有川組の捕鯨業経営の動向が掴めるが、享保初期頃には捕獲量が急激に下がり、赤字経営であったことが読み取れる。

そのため、表4にもあるように享保13年には有川組単独での捕鯨業が一時休止となり、翌年の同14（1729）年には、魚目村との協定が行われ、同16（1731）年には、有川組は深澤組と魚目村との共同によって捕鯨業が展開された。さらに、延享4（1747）年に魚目村との再協定となるまでも、他藩であった平戸藩の的山大島の鯨組主であった井元七左衛門なども進出して捕鯨業経営を行い、他の庄屋によっても有川浦において鯨組が活動した。しかし、拙著でも述べたように、これ以後有川浦の近隣の村単独による捕鯨業経営は円滑に行くことは無理となっていた¹²⁾。この点に関しては、捕獲量の減

9) 前掲宇久町郷土誌編纂委員会編『宇久町郷土誌』（1967年）、前掲同編『宇久町郷土誌』（2003年）を参照。

10) 末田前掲書、第2章と、とくに同章の註3)と註52)を参照。他に新魚目町教育委員会編『新魚目町郷土誌 史料編』（1988年）、中園成生「西海漁場における網掛突取捕鯨法の開始」（平戸市生月島町博物館『島の館だより』VOL.11, 2007年）を参照。

11) 末田前掲書、第2章の註52)を参照。

少も含めて次節で述べる。

表4 元禄期(1688~1703)~宝暦期(1751~1763)の五島藩有川浦における鯨組主の変遷

期 間	鯨組主名
元禄3(1690)年	有川浦(五島福江領)は庄屋江口甚右衛門, 五島藩宇久島の山田茂兵衛 魚目浦(五島富江領)は庄屋川崎伝左衛門, 大村藩の深澤儀太夫
元禄4(1691)年	有川組本格的に開始
元禄4年~同6(1693)年春迄	江口甚右衛門(有川浦)と山田茂兵衛(宇久島)の共同(「舳」)
元禄6年冬より	組支配役江口甚右衛門, 有川組単独(「一手」)にて開始
元禄7(1694)年	組支配役江口甚右衛門, 江口甚五右衛門
享保2(1717)年	組支配役江口甚右衛門, 江口甚五右衛門, 坂本貞兵衛
享保3(1718)年	組支配役江口甚五右衛門, 坂本貞兵衛
享保11(1726)年	組支配役江口甚五右衛門, 坂本貞兵衛, 近藤源右衛門
享保12(1727)年	唐津藩呼子浦の茂三郎より借銀
享保13(1728)年	有川組の単独(「一手」)での鯨組は一時休止
享保14(1729)年	魚目浦との協定
享保16(1731)年	有川組と大村藩の深沢組・魚目浦との共同
享保17(1732)年冬~同20(1735)年冬迄	平戸藩的山大島の井元七左衛門(捕獲高不明)
元文元(1736)年冬~同4(1739)年春迄	庄屋中山捨六(捕獲高113頭)
元文4年冬~寛保3(1743)年春迄	中山徳兵衛(捕獲高131頭)
寛保3年冬~延享4(1747)年春迄	中山徳兵衛, 庄屋中山徳右衛門(捕獲高121頭)
延享4(1747)年	魚目浦との再協定
延享4年冬~寛延元(1748)年春迄	中山徳兵衛, 庄屋中山徳右衛門, 唐津藩呼子浦山下吉次(捕獲高13頭)
寛延元年冬~宝暦3(1753)年春迄	唐津藩呼子浦の田中原右衛門(捕獲高29頭)
宝暦3年冬~同4(1754)年春迄	江口甚五右衛門, 唐津藩呼子浦の3代目中尾甚六, 魚目浦の中野太左衛門, 同浦の湯川久次右衛門(捕獲高74頭)
宝暦4年冬~同5(1755)年春迄	同上(捕獲高102頭)
宝暦5年冬~同6(1756)年春迄	同上(捕獲高96頭)
宝暦6年冬~同7(1757)年春迄	同上(捕獲高104頭)
宝暦7年冬~同8(1758)年春迄	同上(捕獲高98頭), 但し江口甚五右衛門死去
宝暦8年冬~宝暦12(1762)年迄	唐津藩呼子浦の3代目中尾甚六

出所) 文政五年午三月「有川・魚目御境目取合手引帳 青方運善」, 藤本隆士編「有川鯨組式法定(1)・(2)(青方文書)」
 (『福岡大学商学論叢』第28巻第4号・第29巻第1号, 1984年3・7月), 「元禄四未年より享保十三申年迄有川組鯨
 突揚并組入目年々指引目録仕上帳 江口甚右衛門正利・江口甚五右衛門種重」(青方文書)(長崎県立長崎図書館所
 蔵), 延享四年卯六月十七日「覚」(青方文書)(長崎県立長崎図書館所蔵), 有川町郷土誌編集・編纂委員会編『有川
 町郷土誌』(1994年)302~304頁より作成。

12) 有川町郷土誌編集・編纂委員会編『有川町郷土誌』(1994年), 前掲編『宇久町郷土誌』(2003年)。他に有川組に関し
 ては, 荒木文朗「五嶋有川湾における網取り捕鯨の歴史」(『立教大学日本学研究所年報』第7号, 2008年), 同編『江
 口文書』第3~6集(荒木文朗私家本, 2007年)が最も参考になる。

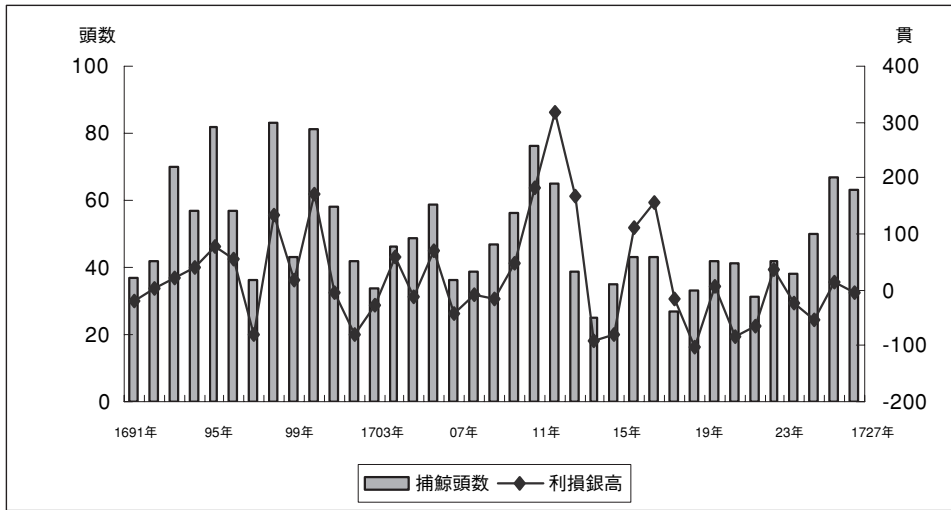


図3 元禄・享保期における有川組の捕鯨頭数および利損銀高

出所)「元禄四未年 享保十三申年迄有川組鯨突揚并組入目年 指引目禄仕上帳 江口甚右衛門正利 江口甚五右衛門種重」長崎県立長崎図書館所蔵，西村次彦『五島魚目郷土史』（西村次彦遺稿編纂会，1967年）122～129頁，森山恒雄「五島藩」（金井圓・村井益男編『新編物語藩史』第11巻，新人物往来社，1975年）343頁，有川町郷土誌編集・編纂委員会編『有川町郷土誌』（1994年）288頁より作成。

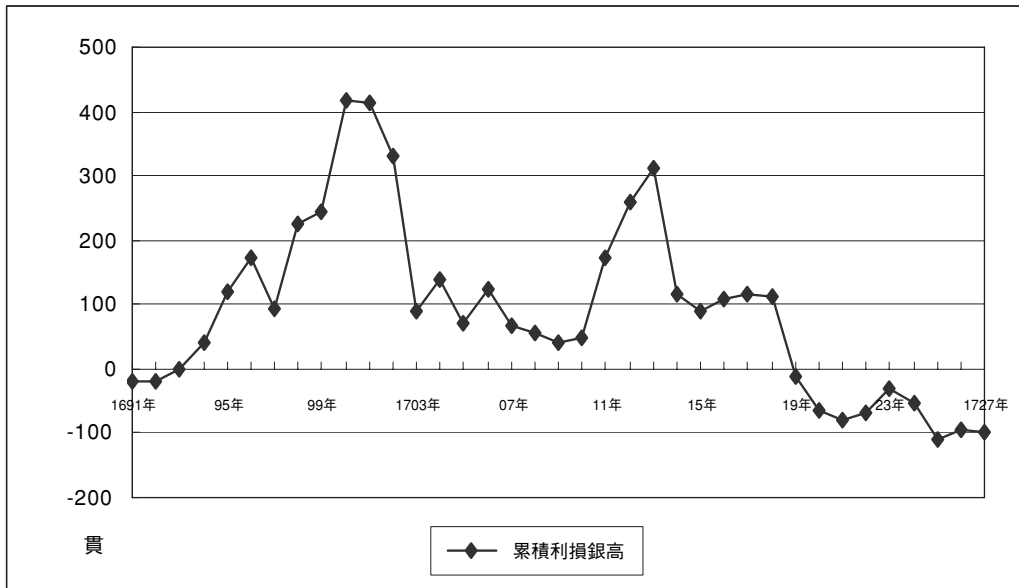


図4 元禄・享保期における有川組の累積利損銀高

出所) 図3と同じ。

4. 宝暦・寛政・文化期の五島藩における鯨組の展開

次に、宝暦期以降寛政期をへて文化期までの五島藩における鯨組の展開を考察する。従来、この時期の五島藩における鯨組の経営展開を分析している論考は、管見の限りほとんど皆無であった。しかしながら近年刊行された『有川町郷土誌』や『宇久町郷土誌』では、捕鯨業がこれまでよりも大きく取り上げられている¹³⁾。ところが、言うまでもなく町史であるために、それぞれの地域レベルの論述でしかなく、そこから五島藩における捕鯨業の成立・展開の全体を展望するのは難しい。そこで本節では、これらの郷土誌資料を活用しながら、前節から引き続き長崎県立長崎図書館所蔵の『青方文書』の近世編と他の近世西海捕鯨業史料から、五島藩全体における鯨組の活動の実態を描き出すことにする。なぜならば、この時期からの五島藩の鯨組による捕鯨業経営の展開過程が、ただ単に五島藩の捕鯨業の実態を現すだけでなく、西海地方全体の捕鯨業の姿、つまり西海捕鯨業地域の特殊性を顕著に物語っていると考えるからである。

まず宝暦・安永期については、前節の表4を参照してもらうと、元禄期から享保期において有川浦で活躍していた江口甚五右衛門が、宝暦2(1752)年に6ヶ浦から鯨組の引き受け願いを承諾して、再び組支配役となり、鯨組を再開するが¹⁴⁾、単独経営では長続きができずに、元禄6(1693)年に有川組による単独体制になる以前と同じく、他藩の鯨組が進出するような現象が起こってくる。その代表的な鯨組が、唐津藩呼子浦と小川島を本拠地とする鯨組主中尾甚六であった。

この中尾組では、2代目中尾甚六が宝永・正徳年間(1704~1715)から突取法による捕鯨業を開始し、享保年間(1716~1735)には網取法へ転換し、鯨組経営を実働していた¹⁵⁾。2代目甚六は、元文4(1739)から延享2(1745)年の8年間の間に有川浦にて捕鯨業を行った¹⁶⁾。さらに3代目の中尾甚六は、表4にもあるように宝暦3(1753)年の冬から江口甚五右衛門ならびに魚目浦の庄屋達と共同で開始し、甚五右衛門が死去する頃の宝暦8(1758)の春まで活動していた¹⁷⁾。この時期の中尾組

13) 本稿の註12)の他、文政五年午三月「有川・魚目御境目取合手引帳 青方運善」(青方文書、長崎県立長崎図書館所蔵)、藤本隆士編「有川鯨組式法定(1)・(2)」(青方文書)、『福岡大学商学論叢』第28巻第4号・第29巻第1号、1984年3・7月)、「元禄四未年より享保十三申年迄有川組鯨突揚并組入目年々指引日録仕上帳 江口甚五右衛門正利・江口甚五右衛門種重」(青方文書、長崎県立長崎図書館所蔵)、延享四年卯六月十七日「覚」(同文書、同図書館所蔵)、前掲編『有川町郷土誌』302~304頁などを参照。

14) 末田前掲書、第2章と同章の註95)を参照。また前掲編『有川町郷土誌』302~304頁を参照。他に中尾組やその後の小川島捕鯨の近代化の実態に関しては、安永浩「東松浦地域における古式捕鯨の操業について」(佐賀県立名護屋城博物館編『研究紀要』第9集、2003年)、神田歳成「西海地域における『小川島捕鯨』—玄海に勇魚を追った男たち—(第8回なごや歴史講座講演録)」(同編『同』同集、同年)、安永浩「明治期の呼子・小川島捕鯨—日記にみる小川島捕鯨会社の操業実態—」(同編『同』第11集、2005年)、同「明治期の呼子・小川島捕鯨—史料翻刻 小川島捕鯨会社日誌史料」(同編『同』同集、同年)、同「明治期の呼子・小川島捕鯨(2)—帳簿にみる小川島捕鯨会社からの鯨肉流通一側面—」(同編『同』第12集、2006年)、同「明治期の呼子・小川島捕鯨(2)—史料翻刻 小川島捕鯨会社帳簿史料」(同編『同』同集、同年)、前掲『くじらといきる—西海捕鯨の歴史と文化』、安永浩「『銃殺捕鯨日記』について—明治期における銃殺捕鯨組の活動—」(佐賀県立名護屋城博物館編『研究紀要』第13集、2007年)、同「捕鯨近代化の諸相—呼子・小川島を中心に—」(『立教大学日本学研究所年報』第6号、2007年)、秀村選三「近世西海捕鯨業における鯨組の諸断面—益富組・中尾組について—」(『九州文化史研究紀要』第50号、2007年)が参考になる。

15) 末田前掲書、第2章の註95)を参照。

16) 前掲編『有川町郷土誌』302~304頁。

は有川・魚目の両浦では、単独による鯨組経営とはいかなかった。むしろ両浦による捕鯨業を援助したような形であった。この背景には、実は3代目甚六が有川浦からの婿養子であったことが大きかったと思われる⁽¹⁸⁾。その時の捕獲量は表4に掲載しているように、中尾組の捕獲技術の後押しと有川・魚目浦の両浦の海域における捕鯨業展開であったために、100頭前後と大量であったことがわかる。しかも中尾組はこの功績が認められ、これ以後宝暦8年から同12(1762)年まで、有川と魚目の両浦において、またそれ以降も両浦以外の五島藩内の捕鯨漁場における鯨組経営の許可を得て捕鯨業経営を行うことができた。その後は、明和元(1764)年と安永元(1772)年から同5(1776)年まで、魚目浦において湯川久次右衛門と共同で捕鯨業経営を行っていた⁽¹⁹⁾。

ところが五島藩へ進出してきた鯨組は唐津藩の中尾組だけではなく。もう1つ自らの藩領域を越えて捕鯨業活動を、頻繁に五島藩において開業していた鯨組があった。それが平戸藩生月島を本拠地とする益富組であり、とくに文化期以降幕末期にかけて図1にみえる下五島の黄島や黒瀬浦において鯨組を開いていた。益富組の五島藩の黄島や黒瀬浦での捕鯨業経営については、拙著において詳細に検討したので⁽²⁰⁾、ここでは省略するが、この中尾組と益富組は平戸藩壱岐を本拠地とする土肥組と並んで、この時期より幕末期まで西海地方の3大鯨組と称してもよいほど活躍した鯨組であった。そこで、五島藩の捕鯨漁場における鯨組の活動を観察することも含めて、寛政11(1799)年における上記の3大鯨組の展開規模を分析しておこう。それを表したのが図5である。これを詳細にみえてみると、まず益富組と土肥組が自領である平戸藩の他、益富組は大村藩、土肥組は対馬藩へ進出していたことがわかる。また、3結組を1組とすると⁽²¹⁾、益富組および土肥組ともに冬組を3組と春組を4組ほど営業させて、西海地方の捕鯨漁場を平戸藩の鯨組が専有していたことが浮き彫りになる。

では、唐津藩の中尾組はどうであったであろうか。一見すると、唐津藩の小川島だけのように窺える。しかし、五島藩の捕鯨漁場における鯨組の活動と絡めて説明すると、実際には中尾組の姿が五島藩から浮き上がるのである。この時の五島藩の捕鯨漁場は、宇久島、有川浦、魚目浦、柏浦、黄島の5つであり、これは本章第2節の五島藩における捕鯨漁場の地域的集中現象にて説明した漁場と一致する。その中で着目する点は、そのうちの3つの捕鯨漁場については他藩の鯨組が開業していたことである。なかでも下五島の冬浦の柏浦と春浦の黄島の両浦を1漁期の組み合わせとして活用していた生島仁左衛門は、実のところ先述の3代目中尾甚六の娘婿にあたる人物であり、甚六の片腕となり大いに活躍していた中尾組の鯨組支配人であった⁽²²⁾。また、中尾家の娘が湯川家に嫁いでいたという姻戚関係もあり、この点を踏まえて注意深くみると、五島藩の捕鯨漁場は中尾組一族が占めていたことになり、益富組と土肥組を含めたこの3組による藩を越えての捕鯨業活動とその勢力範囲を知ることができよう。

17) 前掲編『有川町郷土誌』302～304頁。

18) 前掲編『新魚目町郷土誌 史料編』および田島佳也「小川嶋鯨鯨合戦・解題」(『日本農書全集』第58巻、農山漁村文化協会、1995年)。

19) 前掲編『有川町郷土誌』302～304頁。

20) 末田前掲書、第4・5章を参照。

21) 「勇魚取絵詞」(宮本常一・原口虎雄・谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第10巻、三一書房、1970年)を参照。

22) 末田前掲書、第2章の註95)を参照。

そして、この3大鯨組の活躍が、前節で考察した享保期における有川組の捕獲量減少による大きな衰退要因につながっていた。これは拙著で詳述したが²³⁾、図5をみると、中尾組の本拠地である小川島や土肥組の本拠地である壱岐、益富組の本拠地である生月島の方が、言うまでもなく有川浦より北方から南下してくる冬鯨を捕獲するのに格好の捕鯨漁場であった。すなわち、図5から唐津藩や平戸藩は冬鯨に関して、また五島藩や大村藩は南方より北上してくる春鯨を捕獲する捕鯨漁場を擁していたことになり、このことが西海捕鯨業地域の漁場を地域的に集中させていった要因となった。享保期より唐津藩や平戸藩に冬鯨を捕獲する大きな鯨組が出現し、それによって有川浦において捕獲量が減少していたのであった。そればかりか、これは拙著でも若干触れたが、大村藩の春浦を本拠地と



図5 寛政11(1799)年の西海地方における鯨組の展開

出所) アチック・ミュージアム編「土佐室戸浮津組捕鯨史料」(日本常民文化研究所編『日本常民生活資料叢書』第22巻, 三一書房, 1973年) 525~531頁より作成。

23) 末田前掲書, 第3章の註64)を参照。

して活躍していた深澤組が寛政初期に廃業したことにも関わっていると思われる⁽²⁴⁾。近世中期頃から西海捕鯨業地域の北側に巨大な3つの鯨組の生成と発展によって、南側の地域の鯨組が衰退したのであった。したがって、その競争に敗れた鯨組が存在していた五島藩や大村藩の捕鯨漁場へ、中尾組、土肥組、益富組が藩を越えて進出し、開業していた様子が判明したのが図5であった。

次に、安永の後半期以後から寛政・文化期頃までの有川浦と黄島の鯨組主の変遷を掲げた表5をみてみよう⁽²⁵⁾。ここから江口家による有川組による経営活動が極端に少ないことが一目瞭然である。文

表5 寛政期（1789～1800）～文化期（1804～1817）の五島藩の有川浦と黄島の鯨組主の変遷

有川浦（冬浦・春浦）における鯨組の変遷			
期 間	鯨組および鯨組主名		
安永8（1779）年～寛政7（1795）年春迄	平田右衛門（17ヶ年）		
寛政7年冬～同9（1797）年春迄	平田右衛門，宮崎与兵衛（舩）		
寛政9年冬～同11（1799）年迄	明き浦(1)		
寛政12（1800）年冬～同13（1801）年春迄	生島源右衛門（唐津藩呼子浦生島仁左衛門杵）		
享和元（1801）年冬～文化元（1804）年迄	宮崎与兵衛		
文化元年冬～同2（1805）年春迄	明き浦		
文化2年冬～同3（1806）年春迄	加徳組		
文化3年冬～同4（1807）年春迄	明き浦		
文化4年冬～同5（1808）年春迄	有川にて前細工，和泉屋八平次（柏浦・冬浦，黄島・春浦）		
文化5年冬～同6（1809）年春迄	有川にて前細工，御手組（大浜清蔵），（柏浦，黄島）		
文化6年冬	浅井多兵衛〔大村領川棚〕（大村領蛸浦・春浦）		
文化7（1810）年冬	明き浦		
文化8（1811）年～同9（1812）年春迄	平田右衛門（冬浦）（黄島・春浦）		
文化9年冬～同12（1815）年春迄	平田孝右衛門		
文化12年冬～同13（1816）年春迄	江口甚右衛門		
文化13年冬～同14（1817）年春迄	江口甚右衛門・原兵之助（黄島・春浦）		
文化14年冬～文政元（1818）年春迄	江口甚右衛門（大村領蛸浦・春浦）		
黄島（春浦）における鯨組の変遷			
期 間	鯨組および鯨組主名	捕獲頭数	参 考
文化5（1808）年	和泉屋組	19	和泉屋八平吹（柏浦・冬浦）
同6（1809）年	御手組（柏浦・冬浦）	22	五島藩直轄支配の鯨組
同7（1810）年	中尾	16	呼子浦の中尾組
同8（1811）年	中尾	14	呼子浦の中尾組
同9（1812）年	右衛門	4	平田右衛門（有川・冬浦）
同10（1813）年	生月	19	生月島の益富組
同11（1814）年	土肥	17	壱岐の土肥組
同12（1815）年	土肥	13	壱岐の土肥組
同13（1816）年	甚右衛門	9	江口甚右衛門
同14（1817）年	甚右衛門・兵之助（舩）	10	江口甚右衛門，原兵之助

出所) 天保三年卯之菊月写之「処々鯨組仕立控 青方運善」(青方文書)(長崎県立長崎図書館蔵)，宇久町郷土誌編集委員会編『宇久町郷土誌』(2003年)208頁より作成。

備考) 註(1)：寛政9年～同11年迄の3ヶ年は湯川源次右衛門と中野喜左衛門による鯨組経営の記録がある。

24) 末田前掲書，第2章を参照。

化12（1815）年から文政元（1818）年のわずか数年間しかみられなく、その他は上述の中尾、土肥、益富の3大鯨組による捕鯨業が多く見受けられ、また、それ以外の組主や「明き浦」や「前細工」（船作事などの準備）のみが行われた時期もあった。さらに、次節で述べる藩が経営する「御手組」の姿も知れるし、これまでは有川浦では春浦も行われていたが、この時期は既述のように五島藩でも最も良いとされた春浦の漁場であった黄島に他藩の鯨組が混在して捕鯨業が発展したと言えよう。

このように五島藩における鯨組の捕鯨業を分析してみると、この時期は元禄期前後の有川浦や宇久島に自領の鯨組が展開していた頃と異なっていた。五島藩側としては請浦の運上銀を非常に期待していたので、有川浦や宇久島も含めて下五島の黄島や柏浦などの捕鯨漁場を積極的に他藩の鯨組に請浦をさせていたのであった。その証明の1つとして拙著で述べているが、ちょうどこの時期の文化6（1809）年に、五島藩が益富組へ5人扶持を与えて、宇久島においても鯨組を開いてもよいという許可を出したことに如実に現れている⁽²⁶⁾。五島藩の宇久島は益富組からの本拠地の生月島からも近く、益富組は鯨組を開業する以外でも多くの季節的労働者を雇用していた。同じく拙著で述べているが、益富組は表5にある黄島や黒瀬浦へも進出していた⁽²⁷⁾。黄島からの史料であるが、表6に益富組から五島藩への運上銀および諸勤方銀の一覧を作成してみた。

運上銀に関しては松下が明らかにしているように、先納銀として平戸藩へは上納していたが⁽²⁸⁾、この時期の五島藩とでは、捕獲量によって取り決めが行われていた。しかし、鯨の種類によって明確に決まっていたことは、松下が解明していたとは言え、改めて運上銀が捕鯨業を行っていた諸藩にとっては重要な産業であったことが理解できよう。表7からも、上役から下役までの多くの役職者やその周辺の地域の役職にたずさわる者にまで、鯨組から銭貨のほか鯨の物品類なども渡されていたことがわかる。松下はとくに藩への運上銀に関して指摘していたが⁽²⁹⁾、ここで初めてそれ以外に多くの藩関係の諸役人などへ納められていた点を掲げてみたが、この史料からしても五島藩にとって捕鯨業は重

表6 文政2（1819）年の益富組から五島藩への請浦運上銀および諸勤方銀一覧（その1）

運上銀の種類	運上銀の納付額（備考）
勢美・白長須鯨1本当たり	銀1貫目、油小樽5挺宛（但子持者2本で計算、運上銀600目に減額）
座頭・長須・児鯨1本当たり	銀430目、油小樽2挺（但258匁に減額）
請合口銭	銀2貫目（但1貫目に減額）
濱方浦銀1本当たり	銀75匁（但勢美鯨子持者2本で計算し、児鯨・座頭・長須鯨之当歳者無）
運上先納銀	銀15貫目（但此度者依願取揚運上極）

出所）文政二年卯六月「板部黄嶋春浦請勤方」（益富家文書No1437）より作成。

25) 近世後期の五島藩の捕鯨漁場は有川浦、魚目浦、宇久島、柏浦、黄島、黒瀬浦の6ヶ所であったが、益富組と土肥組はおもに春浦にしか進出しなかった。それは両組とも冬浦は平戸藩壱岐の存在が大きかったからである。すなわち、西海捕鯨業地域の中で冬浦に最も適していた平戸藩壱岐と比較して、五島藩の宇久島や下五島の柏浦は冬浦には適していなかったとも考えられる。また、西海捕鯨業地域の中では大村藩の江島と並んで五島藩の黄島が一番春浦に適していたと思われる。

26) 末田前掲書、第5章を参照。

27) 同上。

28) 松下前掲論文を参照。

要な国産奨励的な産業であり、他藩の鯨組を自領の捕鯨漁場へ誘致することは重要であったことが窺い知れる。

それは言うまでもなく、中尾、土肥、益富の3大鯨組にとっても重要なことであった。3つの鯨組の本拠地の漁場は、冬鯨捕獲に適した捕鯨漁場であり、3つの鯨組の五島藩における捕鯨漁場の狙いは、図5に現れていたように春鯨の捕獲量が大量に見込める春浦にあった。加えて表5の黄島における鯨組の変遷も端的に示されているように、3つの鯨組が交替で黄島へ進出していたことであった。これが五島藩における捕鯨漁場が地域的に集中していった大きな要因であり、それが西海捕鯨業地域

表7 文政2（1819）年の益富組から五島藩への請浦運上銀および諸勤方銀一覧（その2）

納 先	諸勤銀（備考）
蔵許 惣役	初尾皮鯨式尺五寸法、但内身壹樽添 初尾皮鯨式尺法、但内身壹包諸礼銀四枚、組揚大杉原壹束扇子五本入壹箱、 （尤当時開役）
家老	初尾皮鯨壹尺五寸法、但内身壹包諸礼銀三枚宛、組揚大杉原壹束扇子式本入壹箱宛
中老	初尾皮鯨壹尺法、但内身壹包諸礼銀壹枚半、（尤当時開役）
用人	初尾皮鯨壹尺法、但内身壹包諸礼銀壹枚宛
貞方彦兵衛、平山真左衛門、藤原友衛	初尾皮鯨壹尺五寸法、但内身壹包諸礼銀三枚宛、組揚大杉原壹束扇子式本入壹箱宛
大目付	初尾皮鯨壹尺法、但内身壹包諸礼銀八両宛
本ノ	初尾皮鯨壹尺五寸法、但内身壹包諸礼銀三枚宛、組揚り大杉原壹束扇子式本入一箱宛
町奉行、黄嶋組押、大浜代官	初尾皮鯨壹尺法、但内身壹包諸礼銀三枚宛、組揚大杉原壹束扇子式本入壹箱宛
黄嶋番人	初尾皮鯨壹尺法、但内身壹包諸礼銀三拾目宛
口銭上聞	初尾皮鯨壹尺法、但内身壹包諸礼銀五両宛
目附、大家奉行、大手代	鯨内身壹包宛
船奉行、山奉行	銀三拾目宛、但内身壹包宛添
大濱下代、黄嶋庄屋、黄嶋船見	鯨皮壹尺法、但内身壹包諸礼銀壹枚宛
大濱船見	銀三両、但内身壹包添
大濱下船見	銀貳両、但内身壹包添
大濱庄屋	鯨皮壹尺法、但内身壹包添
大濱山掛	銀拾五匁、但内身壹包添
大濱小頭	銀貳両宛、但内身壹包添
黄嶋下船見、黄嶋戸主	鯨皮壹尺法、但内身壹包銀三拾目宛
崎山代官	鯨皮壹尺法、但内身壹包諸礼銀壹枚添
崎山下代	鯨皮壹尺法、但内身壹包銀拾五匁宛
赤嶋濱中	銀八拾六匁
赤嶋戸主	鯨皮壹尺法、但内身壹包銀拾五匁添
赤嶋小頭、崎山庄屋、崎山船見	銀貳両宛、但内身壹包宛
崎山小頭	銀壹両、但内身壹包添
福江町乙名	鯨皮壹尺法、但内身壹包諸礼銀五両宛
大賀徳右衛門	銀壹枚、（但旅人取継役付）

出所) 前掲「板部黄嶋春浦請勤方」より作成。

29) 松下前掲論文。

の南北における捕鯨漁場の地域的集中現象の実態であった。つまり、近世中期頃から冬浦・春浦の捕鯨漁場、冬浦専門の捕鯨漁場、春浦専門の捕鯨漁場の3つの形態に分かれていったのであった。

以上のように、宝暦期から文化期にかけては図6で載せたように、中尾、土肥、益富などの冬組を専門とする大規模な鯨組の五島藩の漁場への進出が顕著にみられるようになった³⁰⁾。それ以前の江口家を中心とした捕鯨業経営の展開ではなく、中尾組の史料³¹⁾や益富組の益富家文書に、五島藩での捕鯨業経営の記録が多く残されていることからしても、この時期には藩を越えた捕鯨業経営である藩際経営がはなはだ五島藩においてもみられ、藩側としても推奨するために活発化させていった。五島藩

宝暦以後天保期までの三大鯨組の五島藩捕鯨漁場への進出

- (1) 唐津藩呼子浦の中尾組: 有川浦(冬・春浦)、黄島(春浦)
- (2) 平戸藩壱岐の土肥組 : 有川浦、黄島
- (3) 平戸藩生月島の益富組: 宇久島(冬浦)、黄島、黒瀬(春浦)

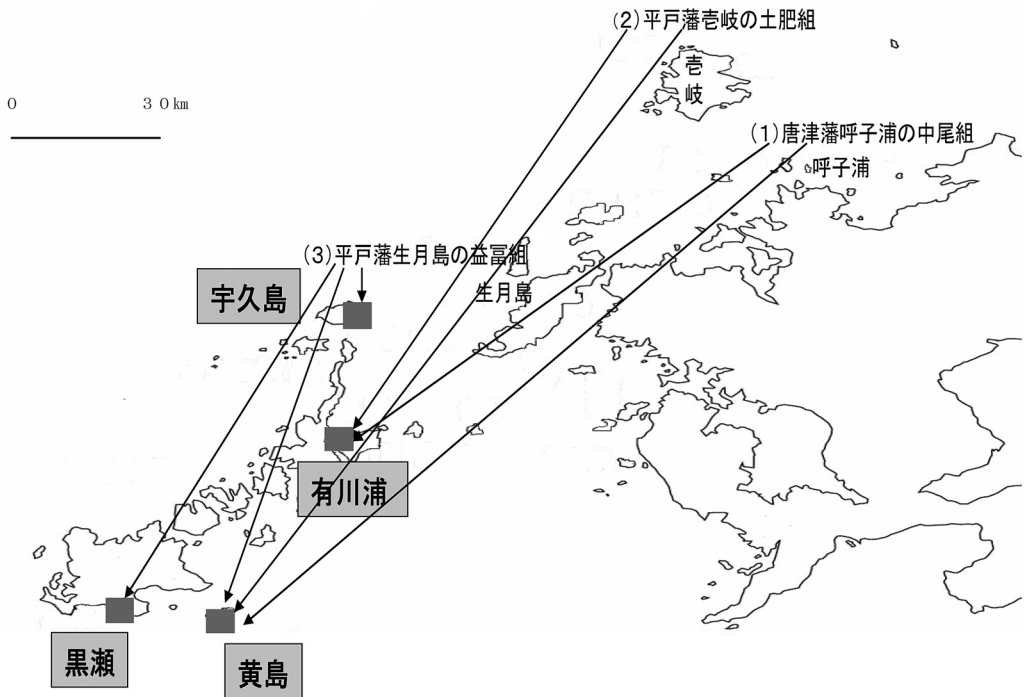


図6 宝暦以後の中尾組、土肥組、益富組の五島藩の捕鯨漁場への進出

30) 末田前掲書、第3章で述べているが西海地方では、春組に比べて冬組の方が平均捕獲量は多く、そのためこの時期より西海地方では、3大鯨組は冬組を専門として経営規模が拡大していったと考えられる。西海地方における冬組と春組の捕獲量の差に関しては今後の課題とした。

31) 前掲「五島に於ける鯨捕沿革図説」。末田前掲書、第2章の註95)も参照。

はこの時期は他藩の鯨組からの運上銀によって、以前の有川浦での江口組からの運上銀を補いつつ、五島藩財政の大きな部分をカバーしていたのであった。

5. 文政・天保期の五島藩における御手組の活動と産物会所の設置

前節までで、従来の研究では空白になっていた宝暦期以後寛政・文化期までの五島藩における鯨組の展開過程に関して明らかにしてきた。本節では、その後の文政期から天保期にかけて五島藩において鯨組がどのように活動し、どのような変遷過程を辿ったかを、五島藩の財政政策に引き付けて解明する。はじめにおいても述べておいたが、捕鯨業と藩財政問題との関係について論じた研究が松下の平戸藩と益富組との関係のみなので、もう1つの捕鯨国であった五島藩について考察することは、平戸藩における捕鯨業の展開との対比になり、これによって西海地方における捕鯨業地域の地域差が鮮明になる。

まず文政期から天保初期にかけての有川浦における鯨組の変遷状況を表8に示した。この表から浮かび上がるのは、当然ながら前節の主軸において分析した他藩からの鯨組の進出についてであり、中尾半兵衛や壺州組がそれに該当すると思われる。しかしこの表からではそれよりも、むしろ表5の有川浦と黄島の両方に出現していた、文化5（1808）年の冬浦から翌6（1809）年の春浦までの五島藩直営とも言える「御手組」が目立つようになってきたことである。つまり、藩の積極的な支援による鯨組の直轄的経営が、表8からでは文政元（1818）年の冬浦から同9（1826）年の春浦までと、同10（1827）年冬から翌11（1828）年の春浦までと長期間にわたって行われた。そこで記録にて確かめるためにも次の史料をみてみよう⁽³²⁾。

文政元寅年 藤原仲右衛門江被仰付有川御手組二相成¹節免札左之通
覚

表8 文政期（1818～1829）～天保期（1830～1843）の五島藩有川浦における鯨組主の変遷

期 間	鯨組および鯨組主名
文政元（1818）年冬～同8（1825）年春迄 ⁽¹⁾	藤原仲右衛門（頭取）、（有川新組・御手組）、鯨173頭捕獲
文政8年冬～同9（1826）年春迄	藤原仲右衛門（頭取）、（御手組）
文政9年冬～同10（1827）年春迄	志佐平左衛門
文政10年冬（中断）	中尾半兵衛
文政10年冬～同11（1828）年春迄	藤原仲右衛門（冬浦）、真弓弥五兵衛（柏浦・春浦）、（御手組）
文政11年冬～天保元（1830）年春迄	壺州組
天保元年冬～同2（1831）年春迄	入江祥平、宮崎与惣衛
天保2年冬～同4（1833）年春迄	志佐平左衛門・三村六左衛門
天保4年冬～同5（1834）年春迄	宮崎与惣衛（魚之日浦筋）

出所) 前掲「処々鯨組仕立控」より作成。

備考) 註(1): 藤原仲右衛門が頭取の文政6（1823）年には有川浦と宇久島への2つの御手組があった。

32) 天保三年卯之菊月写之「処々鯨組仕立控 青方運善」（青方文書、長崎県立長崎図書館所蔵）。

- 一 有川浦鯨組近年組師不都合之仕出し方ニ付³³⁾ハ、及不漁掛中困窮并立入之旅人共迄難渋も掛ケ
 ヲ哉ニ相聞³⁴⁾ニ付、当寅ノ冬ヨリ来ル巳之春迄三ケ年之間、為撫育所中江株式相渡、漁業御免
 被仰付³⁵⁾ニ付、尤藤原伸出張取斗被仰³⁶⁾、先ツ為手当銀子相渡、依之其元共組支配人申付³⁷⁾
 条、逸々仲差図を受手丈夫ニ早備有之様出精漁業可有之³⁸⁾、仍³⁹⁾免札如件

文政元年寅九月

松尾覚左衛門
 有川藤吾
 藤原仲
 宮崎紋助
 藤原友衛

平田祐藏とのへ
 江浜吉助との

右之通り

史料に「有川浦鯨組近年組師不都合」とあるように、鯨組を開く支配役が不足しており、そのため「漁掛中困窮并立入之旅人共迄難渋」になり、藩の役人であった「藤原仲右衛門」が中心となって、「平田祐藏」と「江浜吉助」が「組支配人」となり、「御手組」が開始されたのであった。これは表5にあった寛政・文化年間における「明き浦」や「前細工」⁽³³⁾のみの時期とも関係しており、やはり平戸藩を中心とした冬鯨を中心に捕鯨業を展開していた3大鯨組の影響があり、その結果鯨捕獲量が減少したと考える方が妥当であろう。このため、有川浦と魚目浦において庄屋を中心とした村による捕鯨業経営では無理な段階に来ていたと推測できる。また、ここに名前があがっている藩側の役人として松尾覚左衛門、有川藤吾、藤原仲、宮崎紋助は、前節の表6の原文の史料である文政2(1819)年の益富又左衛門殿に対する請浦願いに関する認可状にも出現していた人物と一致する。このように五島藩としては、藩内外の鯨組に藩内の捕鯨漁場において開業させることを積極的に行った。これには五島藩の財政が、この文政期の段階でかなり逼迫状態であったことが背景にあったからである⁽³⁴⁾。

しかも表8からも知れるように、有川浦において8年間で173本が捕獲され、一応の成功をおさめ、そのことによって五島藩では天保期に入り、有川浦だけでなく宇久島もあわせた2つの浦において「御手組」を活動させていくことになる。その史料を次に掲げておこう⁽³⁵⁾。

天保二卯年 免札左之通
 覚

33) 前掲「勇魚取絵詞」を参照。

34) 森山恒雄「五島藩」(長崎県史編集委員会編『長崎県史』藩政編、吉川弘文館、1973年)、同「五島藩」(金井圓・村井益男編『新編物語藩史』第11巻、新人物往来社、1975年)、同「福江藩」(藤野保・木村礎・村上直編『藩史大辞典』第7巻九州編、雄山閣出版、1988年)などを参照。

35) 前掲「処々鯨組仕立控」。

- 一 有川浦鯨組近年組師不都合之仕出シ方ニ付³⁶ハ、及不漁掛中困窮并立入之旅人共迄も難義越掛³⁷ト哉ニ相聞³⁸ト、当卯冬³⁹来ル丑ノ春迄十ケ年之間、所方為撫育別段之御仕法ヲ以株式所方江相渡シ、漁業御免被仰付⁴⁰ト、依之御役ニ出張之上、夫々手当差図可有之⁴¹ト条、其元共江組支配人申付⁴²ト、切角出精其時々之旬気ヲ不違手丈夫ニ早備漁業満足可有之⁴³ト、仍⁴⁴免札如件

天保二卯九月

真弓弥五兵衛
嶺何右衛門
梁瀬善右衛門
平山林左衛門
藤原友衛

江浜吉助との

原久右衛門との

右之通り相渡⁴⁵ト

これは天保2（1831）年の史料であるが、この年から同12（1841）年の「丑之春迄十ケ年之間」は、鯨組の「為撫育別段之御仕法ヲ以株式」を渡され、藩による鯨組の支援がみられる。さらに天保3（1832）年には以下のような史料がみられる³⁶⁾。

天保三辰冬⁴⁶宇久有川両浦御手組永統中受合定

- 一 東有川両掛一ケ年之諸納銀石組方へ受込高、翌年之御年始御仕出シ与ニ差引返納之事
一 宇久有川両浦取揚之魚運上銀并油共ニ定式通り可相納⁴⁷ト、尤右之外別段拾五貫目モ魚不漁ニ不相拘永統中年々組上り上納之事

右之通り此節御役ニ決談之上相極⁴⁸ト条、組方為永統一紙如件

天保三年辰六月

御藏許

宇久有川両組方

翌3年の冬浦から、宇久と有川の両浦の御手組が「永統」となったとある。しかし、注意しておかなければならないのは、五島藩が両浦の鯨組を「永統」させたい意思が見える反面、「運上銀」や「油」などの運上銀に関しては、厳しく設定していることである。すなわち、前節の表6で益富組に対しては運上銀を安く設定して誘致を目的にしていたが、藩内の鯨組に関しては、「魚不漁ニ不相拘永統中年々組上り上納之事」とあり、捕獲量に対しての設定ではなく、定式通り納めさせることに決めた³⁷⁾。やはり、この背景には五島藩の財政問題と大きく関係していたと考えられる。

ところで、ではなぜ五島藩は、この宇久島と有川浦の2つの捕鯨漁場を御手組にしたのであろう

36) 前掲「処々鯨組仕立控」。

37) 松下前掲論文。

か。この2つの浦のうち、とくに宇久島は完全に冬浦であったが、鯨の回遊ルートから言っても有川浦も冬組の捕獲量の方が高かった。表5からでも春組は春浦専門へ移っていることがわかり、ここでは自領の黄島か大村藩の舩浦に移動していたことがわかる。つまり、五島藩の黄島や黒瀬浦などは益富組などが活動しており、その背景には他藩、とりわけ前節の3大鯨組は冬浦専門地域であり⁽³⁸⁾、春組の捕獲量を補うために、この時期では五島藩の春浦の漁場を狙っており、冬浦には来なくなっていたのであった。そこで、宇久島の鯨組変遷について表9に載せてみた。ここからみても、山田組が正徳5(1715)年に廃業して以来、享保期以降は他藩の鯨組による出漁が少ないことがわかり、先にあげた益富組が数年間みられる程度である⁽³⁹⁾。

そしていよいよ、天保4(1833)年には先述の史料にも名前がみえていたが、当初は50石の下級家臣であった「藤原友衛」⁽⁴⁰⁾の献策案によって、翌5(1834)年に五島藩は有川浦に産物会所を設置することになる。この点については、森山恒雄と藤田貞一郎の研究がある⁽⁴¹⁾。それらの研究と「青方文書」を参照しながら、この産物会所設置の意図を述べておく。元禄期から五島藩は捕鯨業の中心地となった有川浦に大問屋を設けて、藩が購入したものか、藩内で生産した芋、酒、塩、綿を藩内外の鯨組に対して販売し、また鯨組からは鯨30本の運上銀を先納金方式で上納させる体制を目的として設立した。換言すれば、五島藩の狙いは有川浦の活性化や鯨組に対する販売利潤を目的とした捕鯨業を中核とした産物会所の設置であった。

さらには、幕府をはじめ全国的にも多くの藩が天保期に財政改革を実施するが⁽⁴²⁾、五島藩においても上五島の有川浦と下五島にある城下町福江の双方を合わせた五島藩の商品流通をスムーズに展開させるという領国経済の強化策を実施したのであった⁽⁴³⁾。その上最も重要だったのが藩内外の鯨組を巧みに活用していたことであり、藩内の御手組に関しては冬浦の漁場に、藩外の鯨組には春浦の漁場に集中させていた。これによって、この時期の五島藩における捕鯨業の地域的集中状況が的確に読み取れる。平戸藩は捕鯨業に関して最後まで運上銀制度を貫き通して産物会所による直営事業にしなかったが、五島藩では近世後期に藩が直々に乗り出して行わなければ上手く捕鯨業による運上銀を収奪できない状況になっていた。近世中後期になって冬鯨捕獲を主とする平戸藩と春鯨捕獲を主とする五島藩という2つの形態が現れ、それが2大捕鯨国の決定的な地域差であり、おまけに近世後期の藩財政難に対する産業政策の違いとなっていたのであった。

38) 平戸藩壱岐が冬鯨捕獲の最大の漁場であったが、西海地方の中では冬・春浦を通じて最大の捕鯨漁場であったと考えられる。

39) 本稿の第4節の本文でも触れたが、益富組は宇久島の漁場利用は少なかったが、生月島から近かったために、捕鯨労働者を多く雇っていた。これに関しては末田前掲書、第5章を参照。

40) 本稿の註34)を参照。

41) 森山恒雄氏に関しては本稿の註34)を参照。藤田貞一郎氏に関しては、同「近世後期五島藩における経済思想—藤原友衛『勤業余録』の分析—」(安藤精一先生還暦記念論文集出版会編『地方史研究の諸視角』国書刊行会、1982年)を参照。また、吉永昭「九州諸藩における藩政改革の展開」(『愛知教育大学研究報告』第30輯、社会科学、1981年)を参照のこと。

42) 同上を参照。他に天保の改革全般に関しては、吉永昭「天保の改革—三都中央市場と藩領域経済との関係を中心にして—」(『歴史学研究』第264号、1962年)、藤田覚『天保の改革』(吉川弘文館、1989年)、長野ひろ子『幕藩制国家の経済構造』(吉川弘文館、1989年)、天野雅敏「諸藩の国産奨励政策」(社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣、1992年)などを参照。

表9 五島藩宇久島の山田組以後の宇久島における鯨組主の変遷

期 間	鯨組主名
享保2 (1717) 年	大村藩の深澤源右衛門
享保18 (1733) 年	大村藩の田島与五郎 (3代深澤組組主深澤与五郎のこと) (1)
寛延3 (1750) 年	大村藩の松島与五郎 (同)
明和3 (1766) 年～同7 (1770) 年迄	大村藩の深澤儀平次
天保9 (1838) 年～同11 (1840) 年迄	平戸藩生月島の益富又左衛門
天保9 年	大村藩の篠崎義右衛門
弘化元 (1844) 年	平戸藩壱岐の佐野屋忠次郎
嘉永2 (1849) 年	平戸藩壱岐の八幡屋長兵衛
嘉永4 (1851) 年	肥後国 (熊本藩) の高岡卯惣治
嘉永6 (1853) 年	宇久島村中
安政元 (1854) 年	宇久島村中
安政元年	平戸藩針尾島の覚太郎
安政3 (1856) 年	宇久島村中
慶応元 (1865) 年	五島藩福江領の岩崎福太郎

出所) 前掲『宇久町郷土誌』202・448頁より作成。

備考) 註(1): 享保年間は宇久島へは深澤組の出漁が多かったとされている (前掲『宇久町郷土誌』448頁)。

6. おわりに

本稿では、近世日本の捕鯨業地域でもあまり着目されなかった西海地方の五島藩における捕鯨業に関して、同藩内の捕鯨漁場の地域的集中過程を明らかにすることを目的に、延宝・享保期 (1673～1735) から宝暦・文化期 (1751～1817) をへて文政・天保期 (1818～1843) までの長期間を3つの期間に分けて、五島藩における鯨組の変遷および展開過程について同藩の財政問題との関係も考慮しつつ、空間的考察の手法を入れて検討してきた。

これまで近世西海地方において捕鯨業と言えば、先述した大村藩の深澤組や中尾、土肥、益富の3大鯨組の活躍のイメージが非常に強かった。一方、五島藩においても有川村の江口家の捕鯨業活動は知られていた。しかし前者と後者の鯨組の経営展開が相交わることなく別々に論じられてきた。しかしながら本稿での分析によって、これまで個別の鯨組経営やその経営展開の過程をそれぞれ単独で論じられてきた西海地方の鯨組が、実際には五島藩の捕鯨漁場において混在し、かつ近世後期に至っては捕鯨漁場によって棲み分けができていたことが判明した。

近世前期より西海地方において突取法による捕鯨業が開始されたが、その中でも五島藩は平戸藩と並んで西海地方では有数の捕鯨の好漁場を擁していた。その結果、五島藩では17世紀後半から有川浦において江口組が、宇久島では山田組が網取法による捕鯨業活動を始めた。最初は五島藩においても平戸藩や大村藩と同様に自藩から鯨組を輩出していた。しかし、近世中後期以後幕末期に至るまで平戸藩と比べて大規模な鯨組の出現はなかった。その背景には、1670年代の延宝期頃から五島藩では西海地方における他藩の鯨組の影響を受け始め、それ以後宝暦期頃を境に幕末期まで盛んに他藩の鯨組が五島藩の捕鯨漁場へ進出していたことがあった。

これが享保期頃前後に創業し、最初は自藩で経営活動をしなが、他藩へ遠征できるほど巨大な鯨組となった中尾、土肥、益富の3大鯨組の宝暦期以降の進出であった⁴⁴⁾。平戸藩や唐津藩には下りながら南下する冬鯨を捕獲する大規模な鯨組が登場し、その影響によって五島藩においては冬浦とそれに伴う冬組が衰退し、大規模な鯨組が出現しにくい捕鯨漁場の環境となり、同藩の捕鯨漁場は平戸・唐津・大村藩などの他藩の鯨組によって藩を越えた藩際経営として占有されるようになった。それら他藩の鯨組は、最初は有川浦、宇久島、柏浦などの冬浦と、黄島、黒瀬浦などの春浦とともに両浦へ出漁したのであったが、次第に西海捕鯨業地域の北部では冬鯨に比べて捕獲しにくい、上りながら北上する春鯨のみを求めて、五島藩において春鯨の捕獲量が多く望める黄島や黒瀬浦の好漁場への地域的集中がみられたのであった。そして残された冬浦中心の有川浦や宇久島の漁場は、文政・天保期頃から五島藩が自ら藩支援のもとで行う御手組⁴⁵⁾として開始され、天保5（1834）年には鯨組活動中心の有川産物会所を設置することで、五島藩が藩内における捕鯨業、その上他藩の鯨組への物資の販売管理へ乗り出すのであった。

五島藩において近世中後期には有川、魚目、宇久島、柏浦、黄島、黒瀬浦の漁場に、五島藩内外の鯨組が集中するようになっていた。しかしながら、近世前期からこの6ヶ所に集約されていたわけではなく、まず近世前期から五島藩内外の鯨組の変遷とともに、冬鯨と春鯨を多量に捕獲できる五島藩内の海域の捕鯨漁場に集中していき、次いで五島藩側は他藩の鯨組を積極的に誘致するが、それらの鯨組は冬浦を避けて春浦に集中し、拙著で詳述した益富組の藩際経営に代表されるように、複数の漁場にまたがる春鯨捕獲の格好の捕鯨漁場を自ら開発することで、春浦の漁場に集中していったのである⁴⁶⁾。したがって、最終的には五島藩は多くの冬・春浦を擁する藩から特定の冬・春浦を有する藩へ、さらに春鯨捕獲に適した春浦専門の捕鯨漁場を持つ藩へと変化していったのである。今回詳しくは触れていないが、西海捕鯨業地域の中で冬鯨がよく捕獲できる捕鯨漁場を持つ冬浦専門の平戸藩と、春浦専門の五島藩の漁場が見事に分化されていたのであった⁴⁷⁾。

平戸藩においては、大規模な鯨組の益富、土肥の両組とが2つ存在していたために、そこからの膨大な先納運上銀の上納によって、藩による専売制や産物会所の設置はみられなかった。それに対して五島藩では大きな鯨組の出現がなかったために、他藩の鯨組の積極的な誘致を行い、近世後期には藩が生産・販売運営を行う産物会所の体制を取らざるを得なかったのである。なぜならば、この背景には五島藩が平戸藩と並んで捕鯨業を中核とした漁業を中心の島国であり、農村からの年貢とともに漁村からの運上銀に依存していた藩であったからである。このように西海地方の2大捕鯨漁場を擁した藩にあって、冬鯨捕獲中心の平戸藩、春鯨捕獲中心の五島藩というように地域性がみられ、それが両藩における産業政策へも影響していたのであった。本稿では五島藩の捕鯨漁場の地域的集中過程に絞った形で論じてきたが、裏を返せば平戸藩における捕鯨業の地域性を示すことになり、この両藩の

43) 本稿の註34)と註41)を参照。

44) 益富組以外では、例えば土肥組は対馬藩、中尾組は福岡藩、長州藩などの捕鯨漁場を目指していた傾向があり、各鯨組の本拠地からの移動距離が問題とされていたのではなかろうか。今後の課題としたい。

45) 西海地方に限らず御手組経営の実態については、その定義も含めて近世捕鯨業史にとって今後の大きな課題となる。

46) 末田前掲書、第3～5章を参照。

47) 平戸藩の捕鯨業展開に関しては、末田前掲書、第1・3～5章を参照。

捕鯨業の特色が掴めたことで、西海捕鯨業地域の特殊性がここに判明することになったと言えよう。

このように地図を活用した空間的分析を入れた地理学的側面から考察してみると、西海地方における捕鯨漁場の地域的集中化と、冬浦と春浦の分化現象が生じていたことが判明し、そのことによって他の3つの紀州、土佐、長州の捕鯨業地方と西海地方とが異なる捕鯨業地域であったと理解できる。よって他の3つの捕鯨業地方と違って、この西海地方の諸藩が有する捕鯨漁場の地域的集中化が藩際経営を成立ならしめたのであり、ここに西海捕鯨業地域の特殊性である藩際捕鯨業の経営展開が近世中後期に積極的にみられたのである。それがこの捕鯨業地域における近世前期の突取捕鯨業の鯨組の成立から中後期にかけての網取捕鯨業による鯨組の展開という連続的な発展につながっていた大きな要因であった。しかしながら地理学的側面から分析しても、捕鯨業経営が藩側の財政および領国経済問題と密接に関連していたことを看過してはならない。考察してきたように五島藩内における捕鯨業経営の展開過程は、五島藩の財政や領国経済を支える上で、それとの大きな関係においての鯨組や捕鯨漁場の変遷過程でもあった。

以上、本稿では古文書重視の歴史的視点のみならず、地理学的視点を取り入れることで、これまで研究がほとんどなかった近世日本における捕鯨業地域の形成過程と、西海地方における大規模な捕鯨業という産業と藩領国との関わりを明らかにした。

Formative Process of Regional Concentration in a Japanese Whaling Fishing Ground in the Edo Period : Analysis of the Particularity of the Saikai Whaling Industry Area

Tomoki Sueta

The whaling industry in early modern Japan was the greatest fishery in Edo period. At the time, whaling was mainly conducted in four districts (i.e. Kishu, Tosa, Tyosyu, and Saikai). whaling industry was carried on by large-scaled industrial management object which was called “whaling organization (kujira-gumi)”.

I have for my object to make the regional concentration process of the whaling fishing ground in Goto Han clear about a whaling industry in Goto Han who didn't also aim so much in the Saikai area this time. That was separated 3 periods in an extended period from Enpo and a Genroku period to Bunsei and a Tenpo period here in particular, and a change and the development process of the “whaling organization (kujira-gumi)” in Goto Han were considered, also considering a relation with a financial problem of Goto Han.

When saying a whaling industry in Saikai area in the Edo Period up to now, I was very strong in an image of an achievement of Fukazawagumi of Omura han and a big “whaling organization (kujira-gumi)” of 3, Nakao, Doi and Mastomi. On the other hand, activity of the Eguchi family of Arikawa village was learned about in Goto Han, too. But development of the “whaling organization (kujira-gumi)” of the former and the latter has been talked on separately without associating. But, the Saikai area “whaling organization (kujira-gumi)” which can have talked on individual “whaling organization (kujira-gumi)” management and its development process independently respectively up to now was intermingled in a whaling fishing ground of Goto Han actually by this analysis. Moreover it was revealed that habitat segregation was done by a fishing ground as for the latter period in the Edo Period.

And when it was considered from a geographical side, regional centralization in a whaling fishing ground in Nishiumi area was seen, and moreover it was revealed that a differentiation phenomenon in a winter fishing ground and a fishing ground in spring has formed. It's understood to be different from a whaling industry area of 3, other Kishu, Tosa and Nagasu from the thing. In other words, it was being enabled that management activity in fishing ground area of sea of a whaling industry in this Saikai area is formed beyond the Han. Development of a whaling industry management was seen aggressively in the the inter-han whaling industry which is the characteristic of the Saikai whaling industry area here. That led to successive development by the “whaling organization (kujira-gumi)” from formation in the first term in the Edo Period in this whaling industry area to the latter period.

Above, the geographical angle as well as the historical science-like angle of the ancient document emphasis were taken in by the main subject. And I made it clear about formative process in a whaling industry area in Japan in the Edo Period when I had almost no studies up to now by that. Moreover the local industry as a large-scale whaling industry and concerning in Han fief were made clear.